

## 研究授業「保育原理 I B」の実施

松原勝敏

### Enforcement and reflection of an open class “childcare principle I B”

Katsutoshi Matsubara

#### Abstract

This paper is the record of an open class performed for the first time in the Department of Early Children Care and Education of Takamatsu Junior College.

About the open class performed by Matsubara, this paper records the outline and aims at considering as future study materials.

The main contents of this paper are the aim of a lesson, the method of guidance, a teaching plan, and the points of a lesson on the day.

key word : an open class, lesson research

本稿は、高松短期大学保育学科で初めて行われた研究授業の記録である。本稿は、本稿を執筆する松原が担当して行った研究授業について、その概要を記録し、今後の研究資料とすることを目的としている。

なお、本稿の項目番号 2 ~ 7 については、当日の配付資料をそのまま掲載してある。

#### 1 . 研究授業の日程

研究授業及び検討会は次の日程で行われた。

##### 研究授業

日 時 : 2003.12.15 . 4 校時 14 : 40 ~ 16 : 10

場 所 : A31号教室

授業科目 : 保育原理 B (担当 : 松原勝敏)

## 検討会

日 時：2003.12.15 . 5 校時 16：20～17：50

場 所：保育演習室（A館4F）

研究授業への参加者は、学長をはじめ12名、検討会への参加者は、他学科の教員を含めて8名であった。現時点での研究授業は、私学共済の「大学教育高度化推進特別経費 教育・学習方法等改善経費」による補助を受けてはいるが、「試行」として行われている。そこで、残念なことではあるが、研究授業のために特別な時間帯が設定されたわけではなく、それゆえに、保育学科の教員であっても自分の担当する授業が同じ時間帯にあるために参加できないという実態もあった。

## 2. 「保育原理 B」の保育者養成カリキュラム上の位置づけ

本講義は、保育士資格取得のための「必修科目：保育の本質・目的の理解に関する科目」の「保育原理」（4単位）のうちの2単位分に該当する科目である。

1998年の学科改組以来、保育原理は松原が通年で担当していた。しかし、2000年度から2002年度にかけて行った「保育者養成カリキュラムの構造化プロジェクト」の過程において、保育学科の研究室担当の全教員が学生の2年間の修学期間を通して教室で顔を合わせることができるように科目の配列を工夫するという配慮の下、平成2002年度から通年4単位の授業を前期と後期に分割し、前期を「保育原理 A」（2単位）として坪井貴子助教授が、そして、後期を「保育原理 B」（2単位）として松原が担当することとなった。

こうすることによって、それまでは1年生前期に担当する科目がなかった坪井助教授が1年生全体を対象とする科目を担当することができるようになり、重要な保育実習の指導へスムーズに移行できるようになったこと、保育の理念・歴史・制度など様々な内容を扱う保育原理において得意分野を2名の教員で分割担当することによって授業者の負担を軽減するとともに、より専門性を生かした授業実践の実現などが可能になった。

なお、授業においては、授業担当両者の十分な打ち合わせと学生の金銭的負担を軽減するために同一のテキスト（森上史朗編『保育原理』（新・保育講座1）ミネルヴァ書房、2001年）を使用するようにした。

### 3. 「保育原理 B」の目標

本講義では、「子どもの見方，保育の考え方，保育の歴史に関する基礎知識を身につけると同時に，今日の少子社会の進行や子どもを取り巻く様々な環境の変化の中で多様化する保育ニーズにも目を向けて欲しい」，「本講義を通して，これからの保育現場に出ようとするあなた方には，『保育者は子どもが好きだけではとてもじゃないけど勤まらない』ということを実感するとともに，保育者としての基礎知識と意欲・態度を形成して欲しい」（2003年度シラバス）という願いをもって講義を行っている。

教育目標としては、「保育に関する思想・歴史・制度的な面を中心に，保育者として保育の在り方を考えて行くに必要な基礎知識の習得」を掲げた。

### 4. 学習者の状態

本講義の受講生は，保育学科1年生90名である。全員が保育士資格の取得を目指していると授業者は認識している。また，全員が保育士資格と幼稚園教諭の免許状を取得するはずであるが，8割近くの学生が保育所への就職を，幼稚園と保育所の違いや自分の向き不向きなどを考えずに漠然と目指している。

入試をクリアして入学してきた学生ではあるが，学生達の学力や興味・関心には大きな差がある。また，最近の学生の傾向として多く見られるように，授業中に落ち着かない様子も見られる。また，1校時に体育の授業がある学生が全体の3分の1，3校時にレクリエーション実技の授業を履修している学生が過半数と体力を消耗する授業のために4校時には疲労がたまっている学生もいる。

しかし，後期に入って幼稚園に観察実習に行くようになり，また保育実習に出る時期が近くなってくるにしたがって，若干であるが保育学生としての自覚が出てきた学生もいる。

学力的には十分とは言えないまでも，全体的にはまじめな学生が多い。授業中に自己抑制が効かず私語をしてしまう学生がいないではないが，静粛が保てないということはない。自己抑制が効かない学生は，教室後方，最後列か最後列から4列ほど前あたりに着席することが多い。ただ，私語を始めると個人名を挙げて注意することにしているので，「見られている」「名前を覚えられている」と意識していると思われる。

授業内容に対しては，学力的に不足する学生や学習の習慣が十分に身に付いていない学生に加えて，保育者になるには理論の理解が大切であるときちんと認識できていない学生が多いので，総じて「難しい」と認識していると思われる。もちろん，授業者の授業方法

にも問題があるうが、できるだけ、保育を構想していくために必要な学習内容であることを強調しながらこれまで講義を行ってきた。学習上の困難を感じながらも、学習態度はそれなりにできてきている。

#### 5. これまでの講義内容と本時の内容

後期の最初は、授業担当者の出張のために授業が行えなかった。また、月曜日は、いわゆるハッピー・マンデーによる休日及び祭日の影響で講義回数が進んでいない。

12月15日の授業は、9回目の授業になる。

##### ・第1講(9月29日) オリエンテーション&「子ども観について考える(1)」

第1回では、まず、保育原理 Bの講義についてのオリエンテーションを行った。その際、まず第一に、講義に対する学習意欲を喚起することを目標にした。これは、学生たちが「松原先生の授業は難しい」と感じている学生が多いこと、理論的な学習が保育者になるに当たってどのような意味を持つのかを理解していない学生が多いことを考慮して、保育者として子どものための保育を行うために理論的なバックボーンを持つことがいかに大切かを学生たちに説明した。

次に第1回目の学習内容である子ども観について考えていくにあたり、学生一人一人が、子どもに対する自分の考え、友達の考えを通して、自分の子ども観について考えることを目標にして、バズ形式で授業を行った。ところで、本時の目標を「考える」の水準にとどめたのは、子ども観は各自の物の見方や経験に左右されるし、今後も各自が高めて行くものであって固定的なものではない、との授業者の判断によるものである。

話し合いは、まず自分のノートに自分の子ども観をまとめさせた後に、前期の保育学研究法の時のグループに分かれてバズ形式で子ども観を考えてもらった。そして、各グループでまとめられた子ども観を、携帯電話を使って、松原のメールアドレスに送信してもらった。これは、第2講でクラス全体での検討材料としてプリントするための原稿を松原が打つ時間を節約するためである。

##### ・第2講(10月6日) 「子ども観について考える(2)」

第2回では、先週出た多様な子ども観について考え、自らの子ども観を深めることと、子ども観をもつことの大切さを理解し、子ども観を大切にする姿勢をもつことを目標にし

て授業を行った。

まず、学生たちから送信されたメールを編集して作成したプリントを学生に配布し、自分や自分のグループ以外から出た多様な子ども観に目を通すことによって、自分たちの表現した子ども観が「本当に子どもだけに当てはまることなのか」をチェックしてもらった。学生からの回答の多くは、別に子どもにだけ当てはまるものではなく、また、そもそも子どもとは何かということについて漠然としたイメージしか持ち合わせていない、あるいは、子どもに対して思いこみを、たとえば「子どもは未熟で無力」「子どもはわがまま」と一方的にとらえる見方をしていたということに気づいてもらえたと思う。

授業の後半では、子ども観がどのようにして形成されるのかを考えるとともに、子ども観とは固定的なものではなく、自らの成長や経験によって高められていくことを確認してもらった。

#### ・第3講（10月20日） 「子ども観について考える(3)」

子ども観に関する授業の3回目である。この回には、学生たちが、子ども観の成り立ちを考え、自分の保育観を顧みることと、子ども観をもつことの大切さを理解し、子ども観を大切にす姿勢をもつことを目標とした。

まず、時代や文化の違いによって子どもの扱い方がどのように異なっているかということから、子ども観の違いが子どもの扱い方を変化させていることを理解してもらった。また、高松幼稚園・高松東幼稚園の目標を示して、保育集団が全体としてもつ子ども観やその背景にあるものを考察してもらった。

そして、日常的な保育の営みにおいても、子どもへの援助に対して子ども観が大きく影響していることを理解してもらおうと同時に、子ども観を高めていくことが保育者としての成長において重要であることを説明した。

#### ・第4講（10月27日） 「保育者に求められるもの(1)」

「保育者に求められるもの」というテーマは、第4講から第6講にかけて扱う。ただ、授業者である松原は、2年次の後期に「教師論」の授業を担当し、「教師論」の授業において総括的かつまとめ的な授業を行う予定であるから、1年次のこの時期には、学生たちに保育学生としての自覚を高めていくためにもできるだけ保育者の在り方について考えてもらう姿勢で授業を行うことにしている。

第4講においては、保育者としての立場から、保育者に求められる資質について考えることと、保育者を目指しつつも自覚が十分ではないという自らの今の状況を理解し、保育学生としての学習意欲を高めることを目標とした。

授業においては、質問票を2つ用意した。まず「保育者に必要だと思うもの」を保育者として必要と考えられている要素16項目の中から3つを選ばせた。また、別の質問票では、どのような保育者になりたいか、保育者にとってどんな資質が必要か、保育者の仕事として考えられるもの、保育者になる自分の長所、保育者になるためには欠けている点などを記述させた。

個々の回答作業が終わった頃に、再びバズ形式でグループごとに話し合いをさせて、自分の意見と他の学生との意見の比較を通して、保育者に求められるものを考えてもらった。

そして、この授業の最後に、「専門家」としての保育者とはどうあるべきかという問いを学生に発して、自分たちが考えている保育者のイメージと保育の専門家としての保育者のイメージにはかなりの開きがあることを理解してもらえるように配慮した。

#### ・第5講（11月10日） 「保育者に求められるもの(2)」

この回には、授業の目標として、自分が目指す保育者像を見つめ直すこと、保育者としての立場から、求められる資質について考えること、自分の今の状況を理解し、保育者としての学習意欲を高めることの3つを掲げた。

まず、2週間前にも書いてもらったことであるが、自分がどのような保育者になりたいかを簡単にノートに記してもらった。そして、学生たちが一通り書き終わったところで、「なぜ、そのような保育者になりたいと思ったのか」との問いを発し、再びノートにまとめさせた。そして、その後、近くの学生と見せ合い、話し合うことや数人の意見を全体に対して発表させることによって、保育者の在り方を考えてもらった。

次に、2週間前の調査票の結果を示して、自分たちが回答した保育者に求められるとして回答したものが、専門家としての保育者につながるものかどうかを考えてもらった。

これらの過程の後に、子どもとの関わりのなかで保育者に求められるものをテキストにそって講義した。

#### ・第6講（11月17日） 「保育者に求められるもの(3)」

今回の授業目標としては、講義の主題が前の2回と同じであるから、保育者としての立

場から、求められる資質について考えることと、自分の今の状況を理解し、保育者としての学習意欲を高めることを掲げている。

授業内容としては、保育者に求められるものというものも多様であるから、授業者の個人的な見解はできるだけ排除し、また、学生たちの復習や自分自身での考察の便を考えて、テキストに沿って講義を行った。

本当は、テキストにある「保護者や社会が求める保育者」の部分も講義したかったが、授業が計画通りに進行しなかったため、途中で計画を変更してその部分は割愛することにした。そして、一連の講義の最後の方の回で扱う保育ニーズの多様化その他の事項に講義内容をシフトすることにした。

なお、今回の授業の最初と最後で、子ども観と同じく保育観も多様であり、時代や文化によって異なること、授業で扱った項目はテキストに従っているけれども丸暗記するのではなく、個々に保育者として何が必要かと言うことを考え続けて欲しいこと、また、保育は人間と人間の関わりを通して行われるものであるから、自分の良さを生かしながら自分らしさを大切にしたい保育ができるように努力して欲しい旨、授業者の思いを伝えた。

#### ・第7講(12月1日) 「保育の歴史(1)」

第7講及び第8講で扱う保育の歴史は、本学の学生に対して授業をすることが難しい。なぜなら、高校までの学習課程において世界史を選択履修していなかったり、授業では選択していたかも知れないが十分な知識の獲得がなされていないままに短大に進学している学生が多いからである。

本来であれば、今日の保育を支える思想を、その本質が学生たちに伝わるように講義しないといけないのであるが、そのような事情で大まかな話で終わってしまう。

そこで、本時の目標は、保育の歴史を学ぶ重要性を理解することと、保育史の重要事項について理解することのみに控えめに設定した。特に、保育の歴史を学ぶ重要性については、授業者が学生たちに常々言っている「保育は小手先の技術で終わるものではない」ということにつながるものであり、今日につながる保育の思想をきちんと理解して、意味のある保育をして欲しいという願いを表していきかけた。また、単調な解説に陥ってしまうと学生の眠気を誘ってしまうので、単調になっても意欲的に授業者の話を聞く意識付けにもなるものと考えた。

具体的には、前期の教育学原論で扱った思想家の話にはあまり触れず、テキストで扱っ

ている重要人物のみについて、その思想、業績等を解説した。しかし、いろんなものを少しずつしか扱えないので、いわゆる「幕の内弁当授業」と言われても仕方がないかも知れない。

・第8講（12月8日） 「保育の歴史(2)」

わが国における保育所と幼稚園の系譜の概要を理解することを目標に、明治時代以後の幼稚園と保育所の歴史を大まかに解説し、今日にあるような二元的制度として幼稚園と保育所があることを理解してもらった。

二元的な制度の背景は、学生たちに理解してもらえたようであるが、制度の背景にある理念や目的などを十分に解説することができず、中途半端な授業に終わってしまったという感はぬぐえない。

・第9講（12月15日：本時） 「育児支援の必要性」

本時においては、今日の少子化問題について、関心と理解を深めることを一番の目標にして、少子化の現状と背景を理解することと、子育て支援の基本的な考え方を理解することを目指す。

今日、少子化の深刻化や女性の社会進出の拡大等によって保育所は、預かった子どもの保育のみに限らず、地域社会における子育て支援センターとしての機能と役割が求められるようになってきた。このようなセンター業務への対応は、私立の保育所が一般に早い。

ところで、後期終了後に1年生は保育実習が始まるが、本学の学生たちがお世話になるのはすべて高松市内の私立の保育所である。また、本学の卒業生の多くが就職するのも私立の保育所である。

そこで、学生たちには、子育て支援について、その基本的な考え方を理解した上で、子どもの最善の利益を尊重できるような保育者になって欲しいという授業者の願いをもって、本時の授業を構成した。

以後、第10講からは、より具体的な子育て支援の方策の検討に移行し、子育て支援社会を支える保育者としての自覚と意欲の涵養につなげたいと考えている。

## 6. 「保育原理 B」第9講の授業展開の考え方

### (1) 本時の授業目標

- ・今日の少子化問題について、関心と理解を深める。
- ・少子化の現状と背景を理解する。
- ・子育て支援の基本的な考え方を理解する。

### (2) 教材の選択

- ・今時の結婚式場の写真
- ・ビデオ「いまだきゴージャスお産」(2002. 2. 17. 「EZ! TV」フジテレビから)  
授業対象となる学生にとっては、結婚や出産は近い未来である。それ故に関心も強いことが予想される。授業の最初にこの教材を提示することによって、授業内容へ学生たちを誘い込みたい。
- ・厚生白書その他からのデータ  
具体的な資料を提示することによって、視覚的に理解しやすいように心がけた。ただし、あまりに提示する資料が多いと、かえって理解を妨げてしまうので禁欲的になるように心がけたつもりであるが、実際にはそうなっていないような気がする。

### (3) 教材提示の方法

通常の授業は、板書計画をもとに板書を行っている。しかし、今回は視覚的な資料を提示することを目指してパワーポイントを利用した。ただ、授業者の構想力と技量の未熟さから十分なものができているとは考えていない。

また、文書がほとんどを占めるスライドもあり、その部分は学生の理解を妨げてしまうかもしれない。

このことについては、第10講で補うつもりである。

### (4) 授業の展開について

#### 導入

研究授業ということで学生に余計な緊張がもたらされることがないように配慮したい。

授業は、通常通り、毎回の授業の最後にまとめさせている感想カードへのコメン

トから開始する。

導入においては、結婚式場の写真やビデオを見ることによって自然と授業内容に引き込まれるように配慮したい。

展開

少子化の背景や実態、子育て支援の基本的な考え方について解説する。この部分では、単調なスライドの提示に陥りやすいので、学生の反応を見ながら、学生たちに考えながら授業に参加してもらえるように配慮したい。

本日の授業においては、できる限り理解することに主眼を置きたい。そこで、ノートをきちんととることを求めず、スライドの内容を理解することに注意を向けるように促しながら授業を進める。本日の内容は、第10講において子育て支援の具体的な方策を扱う前に復習としてプリントを配布することによって整理する予定である。

終末

本時の授業内容の全体を振り返るとともに、学生たちが感じたことを感想カードに記入してもらう。

このカードは、次の授業で数人にコメントすることによって授業が一方向的にならないように配慮するものである。また、カードに記入している感想の内容によって通常点として最終的な評価を左右することになるのでそれなりに真剣に書いてくれる学生が多い。

また、このカードは出席をとる時間の節約をすることにもつながっている。カードの一番下の数字にパンチ穴を空けて、学生には何回目の授業かがわかるようにしてある。人数を確認して配っているし、枚数を間違えて配っても穴が空いているので次の授業にとっておいていわゆる代返の代わりに使用するということもできない。

## 7. 本時の指導案（次頁）

本時の指導案として配布した資料を掲載する。ただ、いつもは板書計画を立てているけれども、研究授業時にはパワーポイントを用いたので、板書は省略した。なお、当日配布した指導案は、授業者が通常の授業にて毎回用意している形式をそのまま使用した。

保育原理 I B	講義計画	対象：保育1年	第9講	2003年12月15日(月)
題目	子育て支援の必要性(研究授業)			
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の少子化問題について、関心と理解を深める。</li> <li>少子化の現状と背景を理解する。</li> <li>子育て支援の基本的な考え方を理解する。</li> </ul>			
講義内容	学習活動・指導上の留意点			
時分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">           学習活動・指導上の留意点については、「【保育原理 I B】第9講の授業展開の考え方をご参照下さい。         </div>			
14h40	カード・雑談			
14h50	今時の結婚式場			
14h55	ビデオ「いまだときゴージャスお産」			
15h10	少子化の理由を考えよう！ 晩婚化の進行			
15h17	育児の孤立化			
15h22	女性への負担集中			
15h30	仕事と育児の両立			
15h38	少子化の影響			
15h48	育て支援の基本的な考え方			
16h03	カード			
資料等	カード、パソコン等資料提示に必要な用具			
備考	研究授業			

保育原理 I B	板書計画	対象：保育1年	第9講	2003年12月15日(月)
パワーポイント使用のため、本日は板書しない。				
メモ・反省点				

## 8．授業を終えての自己省察

まずは、授業を終えての自己反省をごく簡単に述べておきたい。

授業の流れは、指導案の計画通りにできた。これは、一方で、授業内容を十分に研究し、また学生の学力レベルや理解のレベルを正確に把握して、適切な授業構成ができていたと言う見方もあるが、授業者本人は、授業者のペースで授業をしてしまったという若干の感想を抱いている。

視覚的に訴えることがきちんとできたかということについて、できるだけたくさんの資料を使って、子育て支援の必要性が高まっている状況について具体的に理解することをねらったが、提示する資料が多すぎて学生は1つ1つを十分に理解することが難しくなったかも知れない。また、ディスプレイに映し出されたグラフは、全体的な傾向を知るには良かったかも知れないが、細かな数字を挙げて説明する場面もあり、ディスプレイの画面の大きさや解像度に左右されるところが大きいのが、わかりにくかったかもしれない。これは、授業を行うための教室の条件を十分に考慮し切れていなかったと反省する。

次に、研究授業の参加者からいただいたご意見を整理して記述し、授業者自身の学びとしたい。

### (1) 目標設定について

目標設定には学生の実態に応じて設定されるために授業によって異なり一様ではない。今回は、学生一人一人に子育て支援が必要となる背景を具体的に理解して欲しいという趣旨で授業目標を設定した。そこで、できるだけ具体的な資料を可能な限り提示したい、また、出産に関するビデオは、学生にとって近い未来であるために興味関心を強く持ってもらえると思ったので使用した。しかし、ビデオは視聴に相当程度の時間を要してしまう。これらの条件から、授業目標を禁欲的に設定した。

しかし、禁欲的に設定したことが、見学者から見るとやや物足りなかったような感想をいただいた。確かに、学問的な見地から評価するとその評価は妥当であり、学生の問題意識の形成や思考能力育成の点で検討する余地がある。

### (2) 授業全体の流れについて

授業は、指導案に設定していた時間通りに流れていった。この点については、高い評価を得たが、やはり授業者本人の反省として、授業者のペースを優先してしまったのではないかとの思いがある。もう少し、授業に緩急をつけながら、学生のペースを十分に考慮した授業展開を考えていきたい。

### (3) 資料の提示方法について

授業者が行っている通常の授業では、板書計画を立て、黒板のどの位置にどのような板書を行うかを決めてから授業を行っているが、今回は、パワーポイントを使用して授業を行ったことと、スクリーンで黒板が半分ほど隠されてしまうという物理的な条件もあったので板書はしなかった。

資料の提示方法で、多く出された意見は、映し出された資料の中にある数字や文字が小さいために読みにくかったとか、もう少し時間をかけて学生に見せたい資料があった、また、次々と資料が提示されることによって学生の印象に残りにくいのではないかと、言うものであった。そのために、複数の教員からは、スクリーンに映し出す資料をプリントにして配布しておく必要があるとの指摘をいただいた。

この点について、プリントをあらかじめ配布しなかったのは、学生がスクリーンを見てもらえないのではとの不安があったからである。それゆえに、学生の視点を共通の資料に集中させることによって学生の意識を集中させることを授業者は考えていた。しかし、配布資料そのものの用意を怠っていたために、授業中は視線を共有させられていたかも知れないが、授業後に残るものが少なかったかもしれないと反省する次第である。

### (4) 発問の仕方について

授業者は、研究授業の間、適宜、発問をしていたと思っていた。しかし、見学者側からすると、学生が授業者から発せられた問について考えるための時間を十分にとっていなかったと判断された。これは、後にビデオで点検してみると確かに見学者の言うとおりであり、主観的な思いで授業をしていたと批判されても仕方がないと反省する次第である。

### (5) ビデオ教材の使い方について

先に自己反省でも記したが、ビデオは視聴に相当程度の時間を要する。15分間という時間に対して、少々長かったかもしれないという感想をいただいた。しかし、反対に、話題がおもしろくて、学生だけでなく、見学者も引き込まれて見てしまったとの意見もあった。

実を言うと、授業者本人も少々長すぎたと反省している。ビデオなどの教材は便利であるが、授業者の意志に完全に合致する製作意図をもって作成されたものではない。ましてや、今回の授業で使用したビデオは、民間放送局の製作による娯楽番組の中で

放送されたものを録画した映像であったので、学生の興味を引くにはよかったかもしれないが、必ずしも授業目標に完全に合致したものではなかった。

#### (6) 説明の仕方について - マイクの使用法

学生への語りかけは、ほどよいペースと表現であったと見学者からは判断されたようである。しかし、固定されたマイクから離れて話をしているときに、声が教室全体に伝わりにくいとの意見が見学者から出された。

授業者は、マイクを通した声と地声を交えることによって変化をつけているつもりであったが、授業者の意図は実現されていなかったようである。

#### (7) 学生の理解度の確認、双方向的な授業方法

これも提示した資料が多かったためであろうか、ノートをとる学生が少なかったとの指摘をいただいた。また、授業で提示される一つ一つの事項について、学生の理解を十分に確認できていないのではないかとの意見も出された。

現実的な問題として、保育学科の学生は、保育士資格と幼稚園教諭免許状を同時に取得するために修得すべき単位数がとても多い。また、自宅における予習・復習等は期待できないという実情がある。それゆえに、学生の学習時間は、大学にいる時間帯に限られるという指摘もある。よって、授業時間内に学生がどの程度の理解をしているかを把握することはとても重要である。この点は、大いに反省しなければならない。

#### (8) 学生の自己活動の喚起

教師が教えても学生が学ばなければ学習は成立しない。学習が成立するための重要要件は学生の主体性である。その意味では、やはり、提示する内容が多くて、学生が受け身になってしまったと言う点は否定できないようである。

#### おわりに

研究授業の試みは、本学保育学科において初めてであったが、一応の成果を残すことができたのではないかと思う。それは、保育学科だけではなく他学科や同一キャンパス内にある大学の教員の参加を得ることができたこと、また、専門分野や日常に行っている授業方法が大きく異なる教員までが熱心にメモをとり、授業者による授業の細部にわたって、授業者が気づいていないこと、忘れていたことなどを指摘して下さったことである。

ご支援をいただいたすべての方にこの場を借りてお礼申し上げたい。そして、研究授業に協力してくれた学生さんにも感謝する。

\* 本事業は、大学教育高度化推進特別経費 平成15年度 教育・学習方法等改善支援経費「保育学科における教員の授業研究の実施」によるプロジェクトの一環として行われた。

高松大学紀要  
第 42 号

平成16年 9月25日 印刷  
平成16年 9月28日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811